

住井すゑとその文学の里(六十五)

―牛久沼のほとり―

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功くりはら いさお

抱樸舎の建設と

抱樸舎公開学習会

『橋のない川』が、国民的大ベストセラーとなると、手紙だけでは物足りない読者が、毎日のように不便な牛久沼のほとりの牛久町(現牛久市)大字城中の住井すゑ宅まで訪ねて来る。

住井すゑ本人が気軽に会ってくれるというわさが立つと、市民団体が集団で押し掛ける。中にはマイクロバスで来る婦人会もある。

元来話し好きで、サービス精神旺盛な彼女は、自分の読者であると思うとつい話に熱が入るが、彼女が語ることに夢中になるのは、やはり『橋のない川』を6部まで書いただけでは言い足りなかったからだ。日本の現在そして未来について語りたことにはつきない。

それに全国から来る読者は、出

不精な住井すゑに貴重な情報を提供してもいく。彼女が、『橋のない川』で関西二円を取材したのは例外で、彼女は、講演を依頼されても周りの景勝の地を見学することもない。物見遊山の旅など一度もしたこともないし、温泉につかってみたいなどと考えたこともない。

彼女の唯一の趣味は、キャラクターでもしゃぶつてのおしゃべりかもしれない。

米作地帯の農民が来て、「減反といても俺は減反しない、自分の土地で自分が作るのに、何が文句あるのか。しかし、減反に協力しない農家が補助金をカットされるのはいいんだが、村や農協は上から締め付けられるんだらうな、近所からの圧力がすごくて、孤立しちゃって、やっぱりやっていけない」ことばしていく。

住井は、今の農政は農家が仲間割れするような政策だと思う。ファンで自宅がいっぱいになっ

てしまい、とても家に収容しきれない日もある。

住井は、昭和53年(1978年)に、自分の屋敷の一面に150人ほど入る小ホールを印税で建設し、決まった日にそこで人々に話をすることにした。玄関の横には、小川芋銭の筆になる「抱樸舎」という文字を刻み付けた石碑が立っている。その名前が風変わりなために、牛久という地名と重なり、牛を放し飼いにしている放牧舎と勘違いされたという笑い話もあるが、住井すゑは、敬愛する芋銭と愛する夫に因縁のある舎名にご機嫌であった。

しかし、住井すゑを訪ねる人は、農業問題に興味のある人ばかりではない。出版社の編集者はもちろん、児童文学者、町役場の職員、学生など、各階層の人が集まる。そして、いろいろな機会に彼女に接した人が、また抱樸舎を訪れるようになる。

抱樸舎に通う回数が多い人々は互いに顔見知りにもなった。特に熱心な人々が運営委員会をつくり、住井すゑを囲む会を組織した。会は、「抱樸舎公開学習会」と呼ばれ、住井の話だけではなく、次

第に講師を招くようにもなり、講師の講演の後、講師と住井が対談し、最後は聴衆を交えた討論というスケジュールが大体の日程となり、それを楽しみに全国から人が集まってくる。

講師は、美濃部亮吉、山田洋次、永六輔、野坂昭如、寿岳章子など、多種多彩であった。



抱樸舎(右写真)とは-老子(紀元前369年～286年の間在世。道教の祖)第19章の『人間は素朴で私心を薄くし、私欲を慎むべきである』に由来する。